
The Nightmare Rhapsody

伊東 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Nightmare Rhapsody

【Nコード】

N1511D

【作者名】

伊東 光

【あらすじ】

クールで残酷な殺し屋とそのターゲットに選ばれた会社員「英雄」命を狙われたターゲットに逃げ延びる道はあるのか……。この小説はQUEENの名曲『BOHEMIANRHAPSODY』、『ANOTHERONEBITESTHEADUST』、『KILLERQUEEN』等から触発され、書かせて頂いたことをここに記しておきます。()

エピソードからなるプロローグ

（The Start）

後悔先に立たず、この格言を考えた先人はきつと、普段は慎重なくせにいざとなると猪突猛進で失敗するタイプの人間だったな、と水星は思った。

自分に与えられた役割は後悔することではなくむしろその逆だ、とも思う。

「そうなっているのだから、諦めちまえ」

声に出すつもりはなかったのだが、口走ってしまったようだ。目の前で黙々と後始末を進めている吉良喪絵が振り向いた。

「そんなことを言わずに少しは手伝ってよ」

「いや、なんでもない。続けてくれ」

そういつて眼を吉良喪絵の顔からそむける。

共に働いて、八年にもなるが、相変わらず彼女を直視すると顔が赤くなり動機が激しくなってくる。自分の心が吹き飛ばされそうになるのを必死で抵抗する。

「水星君も手伝ってよ。なんか、本部でごたごたがあつてらしくてさ。工作班の到着が二、三時間遅れるんだって」

吉良喪絵がはめていた血のベツタリついたゴム手袋の片方を平気な顔で外すのを見つめながら水星は言った。

「なぜ？」

吉良喪絵がゴム手袋をはずした手で携帯をいじりながら返す。

「さつき部長から連絡が来たの」

「さつきで、いつだ。気づかなかつたぞ」

「だって、あなたがターゲットを追うのに夢中になっているときに連絡がきたのよ」

吉良喪絵がそう言い切る前に彼女の携帯が短く鳴った。

「あ、また部長からメールだ」

「なんて？」

「ちよつと待って……。えつとねえ…、良いニュースと面倒くさいニュース」

八年間のキャリアから次に吉良喪絵が喋る内容は大体検討が付いた。

「まず、良い方はもう帰って来い、てこと。面倒な方は帰ったら部長が新しい任務を私たちに用意してくれている、てこと」

どうしようか、と尋ねてくる吉良喪絵を見つめながら水星はこう答えた。

「そうなのだから、諦めちまえ」

ANOTHER ONE BITES THE DUST

It Is Dangerous For Hero To See Mercury 【皆野英雄】

みなのお皆野英雄と水星が十年ぶりに居酒屋で再会を果たした。

「久しぶりだなあ、水星。まさかお前から食事に誘われるとは思ってなかったよ」

「なんだか急に、君の顔が見たくなってるね」

皆野英雄に水星から電話がかかってきたのは、午後の営業周りしているときだった。便利なことに機種変更しても携帯の電話番号は変わらないように十数年前からなっていたので、思い切ってかけてみた、というのが水星の言い分だった。

「よせよ、気色悪い。ただでさえ、こっちはげんなりしてるんだぜ」

「え、そんなに僕に会うのが嫌だったのかい」

「違うんだ。最近、変な電話が多くて困ってるんだよ」

電話番号を変えられない、ということは悪質な嫌がらせ電話から逃れることが難しくなるということでもあった。

「へんな？つて、どんな？」

「ほとんど意味不明だよ」

そういいながらビールを口に含み、飲み込んでから続ける。

「最初はさ、殺してやるよ、つていきなり何度も言われまくったんだ。しかも毎回違う電話番号で同じやつのが聞こえて来るんだ。それが、二週間ぐらい続いたんだよ」

「なるほど、その次は？」

「次はさ、詞みたいのをお経のように繰り返して喋って来るんだよ。今日なんて留守番電話に入ってたんだ」

そう言つて、皆野英雄は録音を再生させ水星に聞かせた。

「ああ、これ、僕知ってるよ」と水星が言ったときには耳を疑っ

た。

「これはねえ、たぶんANOTHER ONE BITES THE DUSTっていう曲の和訳だよ。間違いない」

たぶんと言いながら、断定するのは大学生のころからの水星の癖だった。

「ほー、そうなのか」と言ってから、後は水星がきれいな発音で英語の曲を熱唱するのを黙って聞いていた。

「ところで、何の用でお前は連絡してきたんだ」

二人ともだいぶ酔ってきたところで水星に聞いてみた。

「あのねえ、僕は君を救いに来たんだよ。残酷な殺し屋からねえ」

一瞬、水星が何を言っているのが理解できなかった。そのまま、二人とも黙ったままの時間が、数秒、もしくは数分続いた。

「お前、何を言ってるんだよ」

「英雄君にかかってきた電話はねえ、一種の儀式なんだよ。伝統と言い換えてもいい」

馬鹿なことを言うな、と水星に文句を言っただけだった。だが、その眼があまりにも真剣に皆野英雄を睨むので何も言えなかった。

「英雄君は狙われているよ。ビールズパブに許しを乞うのも遅すぎる」

「おいおい、何のことだよ。俺が狙われてる？誰に？ビールズパブって何だ？意味が分からない。分からなさすぎだ」

「時期に分かる。たぶん、分からなきゃ君は、死ぬ。間違いない」
「またもや、たぶんと言いながら水星は断定した。」

「それじゃあ、そういうことで」

水星は立ち上がると、「気をつけてね」と言い残し店を出て行った。

「あいつ……」

皆野英雄がふと、テーブルに視線をやると伝票が目についた。

水星は、勘定を残し店を出て行った。

TO AVOID COMPLICATIONS

「Kill er Queen Saies, Mercury, Your Most Kill Your Friend.」 【水星・殺】

水星が居酒屋から、任務のために借りた部屋に帰ってくると、吉良喪絵が不機嫌な顔で待っていた。

「水星君、いったいどこに行つてたの？勝手な行動してると消されちゃうよ。そうなつても知らないよ、私は」

一人の美しい女性が真顔で「消す」、という言葉を使うのはなんだか現実離れしているような気がした。そのことを吉良喪絵に言うと、あきれた顔で、

「もしかして、今日勝手に抜け出したのはもう一人の君のせいなの？」と尋ねた。

確かに水星には二人の人格があった。一人は今現在、身体の支配権を握っている殺し屋の人格。もう一人は、普段からおとなしく温厚な人格。

学生時代の九割弱は、おとなしいほうの人格が支配権を握っていた。だが、今では殺し屋としての水星が、ほぼいつも支配している。どちらが最初に生まれた人格かは、どちらの水星も理解していなかった。

別人格の存在を分かっていても、互いに言葉を交わしたことは無い。分かっているのは、性格ぐらいのもので、それ以外の情報は、別人格に出会った人間から聞く以外に方法は無かった。

「それなら、まあ、いいや。ところで今回のターゲットが誰かは頭に入っているんでしょうね？」

吉良喪絵は、自分が二重人格だということを知る、ただ一人の人

間だった。

「馬鹿にするな。プロとして当たり前だろうが」

「ちゃんとしたプロならターゲットの情報は、頭に入れた後、処分すると思うんだけど」

そういうと吉良喪絵は水星の腕に、書類の入った封書を押し付けた。

「しまった……、完全に忘れていた」

「気をつけてね。それから、任務実行は三日後だと言うことは忘れてないわよね」

水星は赤面しつつも、「分かっている」と返し、続けた。

「だが……、すまない。この任務は気が乗らないんだ。違うやつに回してくれ」

なんとか伝えようと、吉良喪絵は、

「そんな考え、忘れなさいよ」

「どつちなんだよ」

Her o S t a r t s T o F i g h t M e n y G e n e r a l【?】 P e o p o r【皆野英雄】

皆野英雄が水星と居酒屋で飲んだ日から、三日が過ぎた。

その間も怪しげなイタズラ電話がやむことは無かったし、水星の言い残した言葉も気にかかっていた。

「あのー、皆野英雄さんですか」

低い唸り声で、筋肉隆々の男に声をかけられたのは、皆野英雄が営業の途中で寄った喫茶店の中だった。座った席は、上司に窓越しから覗かれて見つからないよう店内の一番奥だった。恐らく、それがいけなかった。

「はい、そうですけど。何か？」

そう答えた瞬間、男の右手の拳が皆野英雄の横顔に綺麗にクリーンヒットした。

身体が空中に浮き、頭が真っ白になる。何とか目の焦点を店内に

戻すと、不思議な違和感を感じた。

店内の客の誰もが、こちらを見ることなく会話を続け、飲み物をすすっていた。

店員も皆野英雄と殴りかかってきた男のことを無視している。

おかしい、明らかに何かがおかしい。

一瞬、この喫茶店にいる人間は全員目が見えないんじゃないのか、馬鹿なことも考えた。

「貴様を、この場で殺害する。抵抗は無意味だ。貴様ごときが、組織に逆らうことはできない」

男の言う、「組織」が何を指すのかは分からなかった。ただ、そのとき水星の言葉を思い出した。

「英雄君は狙われているよ。ビールズパブに許しを乞うのも遅すぎる」

そうか、遅すぎたのか。なぜだか分からないが、皆野英雄は後悔した。

「遅過ぎたな」

今度は、みぞおちに蹴りが入った。衝撃は感じるが、痛みが来ない。脳が痛みに対応できないようだった。

殺されると思ったとき、鋭い破裂音が鳴った。

男が倒れる。

スローモーションで映像を眺めるようだった。

一人の男性が皆野英雄のもとに、走って近寄ってくる。

このときばかりは、店の中の誰もが無視していられなかった。その男性に全員の眼が釘付けになる。筋肉隆々男以外の眼は。

馴染み深い顔だと気づいた。

「さあ、逃げよう。たぶん、このままだと英雄君は殺されちゃうよ。間違いなくね」

S H E · S A L L O U T T O G E T Y O U

「 Killer Queen Does Not Underst
and Why Mercury Ran Away With
Hero! 」 【吉良喪絵】

「 いったいどうなっているのよ! 」

水星が仲間を撃ち殺し、さらに発煙筒まで使ってターゲットと共に喫茶店から逃げ出したのは二十分ほど前のことだった。とっさのことに誰も反応することが出来ず、みすみす逃げられてしまった。失態だった。

「 まったく、部長にどう説明すればいいわけ! ! 演劇班、さつさと片付けて! 一般人に見られたらたいへんよ、急いで! 堤、堤はいないの! ! 」

そう吉良喪絵が大声で怒鳴ると、喫茶店の奥から堤と呼ばれた小柄な初老の男がトコトコとかけてきた。

「 吉良あ、お前なあ勝手に現場を仕切るなよお。この任務のリーダーは俺なんだぞお 」

いちいち語尾を延ばす喋り方に吉良喪絵は不快感を覚えていたが、口には出さなかった。

「 そうよ、その通りよ! アンタ、リーダーなんだから責任取りなさいよ! 」

すると、堤は、

「 なんだよおお、俺のせいじゃないだろう。殺されたのも逃げたのも、吉良あ、お前のところの暗殺班のヤツじゃないかあ。俺は演劇班だぞおお 」

こんな変な喋り方のヤツが演劇班に所属しているのは不思議だった。

だが、確かにその通りで吉良喪絵は反論できなかった。だいいち、こんな言い争いをしている暇があれば、すぐにでも追っ手を放つべ

きだった。

その点は堤も分かっていたらしく、「搜索・情報処理班と工作班にはさつき連絡しておいた」と、例の語尾を上げるいやらしい喋り方で、皮肉たっぷり言われた。

吉良喪絵は、なぜ水星が組織を裏切るような行動をとったのか理解できなかった。考えたくもなかった。

とにかく、部長になんと行って伝えようか。

吉良喪絵にとってはそれこそが重要なことだった。

Mercury Thought Hero And I
Ran Away From The Beehive 【水星・友】

「大丈夫かい、英雄君」

水星が息を切らせながら、皆野英雄にたずねた。

「だ、大丈夫な分けないだろ。ていうか、何なんだよ。ここ、どこだよ」

水星が皆野英雄を連れてきた場所は、古いだけが取柄のような使われていない工場だった。

「うん。たぶん、それだけ喋れるのなら大丈夫だね。間違いない何かを指摘したそうな皆野英雄を無視して、水星は「いやあ、でも良かった。間に合って」と続けた。

「なあ、水星。いつたい、俺の身に何が起きてんだよ」

皆野英雄が「知ってたんだろ」と迫ってくるので、水星は仕方がなく話し始めた。

「いいかい、英雄君。これから、僕の話すことに偽りはないよ。間違いないからね」

水星はそう、断定してから「英雄君は、狙われているよ」と、話し始めた。

S H E · S A L L O U T T O G E T Y O U (後書き)

サブタイトルのさらにサブタイトルでは、それぞれ、キャラの名前をもじって英文を作ってみました。そちらも読んでもらえれば、嬉しいです。

E x a m p l e ……皆野英雄「Hero

水星 「Mercury

吉良喪絵「Killer Queen

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1511d/>

The Nightmare Rhapsody

2010年10月14日14時53分発行